

せっかち 園長の ひとりごと

2016、12、22

認定こども園あかみ幼稚園・メイプルキッズ 統括園長 中山昌樹

今日は終業式・・・子どもたち“みんな”の顔がそろうのは、2学期は今日まで・・・今年も一年、お世話になりました。その人・そのご家庭で様々ですが、悪いことばかりだった人もいなければ、良いことばかりだった人もいないと思います。いずれにしても来年が（来年も）、子どもたちにとっても皆さんにとっても、有意義で幸せな歳であるようお祈りいたします。

私は特定の宗教を信じていませんが、山や海、島、滝や巨木、大きな岩などに宿っている“スピリチュアルなもの”に畏敬の念を感じます。なので子どもが小さかったころの家族旅行は、いつもそのような所に行っていました。国東、出雲、那智、高野山など。前回の「ひとりごと」でもふれた男体山（日光）もそうです。家族みんなで登りました。

そこに宿っている“スピリチュアルなもの”が私や家族を助けてくれたかどうかはわかりませんが、そのような所に行って、なんとなく心や身体がきれいになった気になることで、日々の暮らしが少し安らかで前向きなものになったのだと感じています。

ぜひ皆さんも、それぞれ味わい深い年越しをお迎えください。

さてまず・・・

初めの話題は、FBで、知り合いの知り合いが紹介していた映画の話題。すでに公にされているものなので、以下に引用します。

幼児教育の投資収益率は7%

現代社会において、幼児教育の重要性は誰もが知るところであり、世界中の親が愛する子供のために最高の教育を与えたいと考えている。また、ノーベル経済学賞を受賞したシカゴ大学教授のジェームズ・ヘックマンによれば、幼児期に1ドルを投資した場合、その子が成人した際に社会に還元される額は7ドルになるという。つまり7%の収益率があるということになるが、これは米国の株式市場のそれより



男体山山頂の太郎山神社

↓続く

はるかに高い数字だ。経済成長の観点からも、幼児教育は非常に大きな意味を持っているといえる。

だが、いつ、どんな環境で、何を教えればいいのかと悩む親は少なくない。

ブラジル人の映画監督エステラ・ヘネルが UNICEF（国際連合児童基金）などの協力のもと制作した『命の始まり』は、そんな悩み多き子育て世代に幼児教育の正しい在りかたについて、有益な示唆を与えてくれる。

自身も3人の子供の母親であるヘネルは、このドキュメンタリーの撮影を通して世界8カ国の両親と専門家に取材。生後2〜3年の幼児が日常のなかでどのように学びの機会を得て、またそれを親はどうサポートすべきかに焦点を当てた。



「詰め込み」より「自由」が大事

一般的に、「幼児の頭のなかは白紙のようなものなので、この時期により多くの知識を与えることが大切だ」と考える親は多いだろう。カリフォルニア大学の心理学者で、長年子供の発達について研究を続けてきたアリソン・ゴップニックも、「幼児は世界でもっとも優秀な科学者にして発明家」と評し、幼児期の学習能力の高さを強調する。

だが、米誌「ニューズウィーク」で「世界でもっとも優れた10の学校」の1つに選ばれたことのあるイタリアのレッジョ・エミリアの教育者キアラ・スパジアリは、「幼児の頭は決して白紙ではなく、無限に知識を詰め込む入れ物ではない」と主張。レッジョ・エミリア式が重要視するのは、「自由」なのだという。

決める自由や動く自由を与えられることによって、子供は好きなものを使い、脳をフルに活用しながら知識を深めることができる。おもちゃのブロックで何か新しい形を作るかもしれないし、キッチンで料理の真似事をはじめかもしれない。ジェラ研究所の所長で精神分析医でもあるヴェラ・イアコネリアによれば、このときに iPad やコンピュータといった特別なツールを使う必要も、専門的知識や技術を教える必要もない。既製の玩具を使って遊ぶより、定規とペンを使って飛行機を作るほうがずっとこどもの脳と想像力を刺激するからだ。大人の役目は、ただ子供たちが自由に遊び学べるよう、彼らの安全を確保することだけだという。

もう一つ幼児の発達に必要なのは、「愛情」だ。子供の脳を発達させるシナプス結合は0〜3歳の間に特に活発で、脳の約80%がこの時期に完成すると言われている。ハーバード大学児童発達研究所の所長ジャック・ジョンコフによると、このシナプス結合をもっとも活性化させるのが、大人との愛情ある交流なのだという。幼児の笑顔や声に大人が反応し、幼児がそれに対してさらに別の反応をする——両者の間に

このような相互作用が生まれると、シナプス結合が活性化し、子供の脳の発達を促すのだ。

最適な遊び場は？

では、遊び場はどんなところがいいのか？ レッジョ・エミリアの教育者シモナ・ボリアリは、不規則で変化に飛んだ「自然」こそが子供にもっとも適した遊び場だと話す。自然の美しさや多様性から、幼児は自然主義や生物学的な視点だけでなく、倫理観や美的感覚も身に付けることができる。また画一的でない環境で体を動かすことによって、自分の身体の可能性にも気づくことができるのだ。

ボストン小児病院のチャールズ・ネルソンは、幼児期の体験が脳や行動の発達に与える影響を長年、研究してきた。その彼によると、幼児期に周囲から手厚いサポートを受けられた子供ほど、健康で生産的な大人になる可能性が高いという。「幼児期の発育は、家の骨組みを造ることに似ています。頑丈な骨組みがなければ家が建たないように、幼児期に豊かな愛情とサポートを受けずに育った子供は将来、充実した人生を送ることが難しくなるのです」

幼児教育がその後の人生を決める——

映画『命の始まり』は、決して取り戻すことのできない幼児期に子供に真摯に向き合う重要性を教えてくれる。

本当はこの映画を自分で観てから、私は自分の言葉で皆さんに紹介すべきですね。ですが、せっちな私なので、ついお伝えしたくなってしまいました。『命の始まり』で検索するとすぐ見つかるので、関心のある方はぜひ、ご自身の目で確認してみてください。私も機会を作ってぜひ観てみたいと思っています



さて次の話題は・・・

これは私自身の体験談です。先月11月のことですが、佐野市文化会館大ホールで「連合教育会・研究発表会」が開かれ、私は、以前「ひとりごと」で話題にした赤見小学校との取組みについて、発表させてもらいました。この取組みは、幼児教育と小学校教育の「接続」カリキュラムを作ったというもの。この取組みは昨年ほぼ毎月、赤見小学校の先生と本園の先生たちが研究会で学び合ったり、授業や保育を観合ったりしたものです。この取組みは今年も継続していて、本当にたくさんの、

↓ 続く

子どもたちにとってのプラスがあった取組みでした。

* 連合教育会とは、幼・小・中・高等学校の先生たちの連携・協働のための会です。

【まず再確認です。なぜ、幼児教育と小学校教育の「接続」が必要か？】

なぜかと言うと、皆さんのお子さんたちには、国際化や、人工知能・ロボットと一緒に働かなくてはならなくなるなどの背景から、「答えが一つではない問題解決」をする力が求められているのです。そこでは下のような、国の教育政策が明らかになってきています。

幼児教育（遊びが中心）が土台となり、「アクティブ・ラーニング」（小学校以降の新しい「学習指導要領」の根幹）が育ち、これを新しい大学入試制度（2020年）が求める新たな学力（生きる力：「答えが一つではない問題解決」をする力など）の育ちにつなげる

【私の発表の中から、いくつかのポイント】

☆生活について・・・小学校では入学3日以内に、ある意味で必要性関係なく、「黒板係」・「図書係」などを決めるのが常識だった

→しかし今回の取組みがあり、今年の4月からは「係」を決めないで1年生の生活を始めた → 私たちが

今年の5月に授業を見に行った時、「黒板係」は決まっていなかったが黒板を消している子どもがいた

→その時何人かの子どもが、黒板の周りでそれを見ていた（黒板消しが3つしかないのに、やりたくてもできない

子どもが見ていた） → 校長先生は「あの見ている子どもの中から不満の声が出てきた時に相談する」と言った

→その後7月に、不満が出る状況になり、相談して「黒板係」ができた → 子どもたちは、「黒板係」が決まった

ことを「イエーイ！」と喜び、その後の仕事をさぼらなかった

☆学習について・・・この点は、まだ現場では課題がある感じ → 3年前くらいの話だが「1年生の夏休みに全国の都道府県を書く

宿題が出て、夏休み明けに全員がテスト」という話を聞いた（その保護者は困っていた） → 今回の発表会で、

私は「学習指導要領に依れば1年生では早すぎるが、子どもが都道府県に触れるのは悪いことではない」「問題は

そのやり方で、例えば“なぞなぞ”や“すごろく”あるいはパズルのような遊びでやったなら、1年生は喜んで

やり、あくまでも結果として全国の都道府県を覚えてしまうのでは？」と発言 → 次の日などに、市内の校長先生

含む何人かの先生方から「あの発表はよかった」と声をかけていただいた

* もちろん、文句や批判ではないとしても、その学校（私は学校名は言いませんでした）の先生からしたら、言われて嫌な思いをしたかも知れません。しかし、「よかった！」と言ってくれた校長先生方は、「子どもたちのためになんだよ」と言ってくれました。